

【視 点】

田園住宅とはどんな住まいか

世紀末を迎えて、オートメーションを中心とする大量生産方式、電気通信技術の発達と情報革命、自動車の普及と流通革命、CO₂ 排出量増加と地球温暖化などわれわれの社会は、急激な変化にさらされている。そして、とかく疎外されがちな人間性をとり戻し、自然との共生を考えることが、大切で、そのためには、当面している景気の低迷を解消するためにも役立つということで、田園住宅の普及を提唱する方々がいる。

丁度、19世紀末、蒸気機関の発展などによる産業革命が進行し、手工業生産から工場生産方式への移行が行われ、その結果、人口の増加と都市集中が進み、石炭煤煙の公害問題が増大し、悪疫の流行などが起きた100年前の世相と一脈似ているとも思われる。当時、健全な都市生活を営むことができるよう緑につつまれた新都市を作ることが提唱されその代表的なものが、エベネザ・ハワード（英国人）の「田園都市」論であった。

拙宅の近所のことになって恐縮だが、隣の魚屋さんの御夫婦も、平素は、娘さん夫婦ともども家業に精を出し、休日には、4WD車に乗って、九十九里海岸の別荘に出かけてしまう。また、休日毎に、ぜんぞく気味の子供達を連れて、八ヶ岳山麓の小屋に行くサラリーマン夫婦もいる。

今や、セカンドハウスは、わが国でも庶民の生活に入りこんできた。このセカンドハウスの取得や供給が、より円滑に行われるように、政策上配慮することは、重要なことであり、なにも遠慮する必要はないと思われる。むしろ、都心居住と並んで、21世紀の住まいの選択肢の一つと考えられるのである。

ところが、この関係で、農振法による農振地域や都市計画法の市街化調整区域の開発規制を撤廃すべきか、否かとなると、話は左程簡単ではない。下水汚水の処理やら、道路交通の問題など、地元自治体の判断を仰がなければならない諸問題がある。

しかも、都市の美、国土の美観と土地利用とは、深い関係がある。第7回新潮学芸賞を受賞したアレックス・カーの「美しき日本の残像」（1993年新潮社刊）を読むと、この1952年アメリカ生まれの青年は、「日本は世界の中で“みにくい国”の一つになってきているのです。外国の友人達は、日本にくるとほとんど失望します。」「友人にどこまで行けば立て看板、電線、コンクリートがみえなくなるのかと聞かれると、答えることができません。」といているのである。

田園と混ざりあっている住まいが、田園住宅なのか、ある程度計画的に、田園と居住地とが配置され、住まいが、田園地帯を無秩序に侵害しないようになっているのが、田園住宅なのか、新世紀に向って、賢明な日本人の判断が問われているのではなからうか。

(財) 土地総合研究所 理事長
河野正三